

Trial & Error

No.284

November-December 2010



■女性医師がいるためだろう、女性の患者も安心して診察を受けに来る。(アフガニスタンで運営するゴレークの診療所にて)

特集

アフガニスタンと日本をどうつなぐか

アフガニスタンと日本をどうつなぐか

「いつも戦争している」「山ばかりの荒れたところでしょ」「アルカイダの隠れ家だっけ？」
JVC 会員の皆様のなかにも、アフガニスタンという国に対してこのような印象を持っているかたもいると思う。しかし、そこに暮らす国民の全員が毎日戦争をしているわけではなく、その多くは普通に生きている普通の人々にすぎない。今回、JVC アフガニスタンで働く二名のアフガニスタン人スタッフが来日した。主な目的は業務調整だが、その合間をぬって話を聞いた。遠く離れたこの国について考えるきっかけにしてもらいたい。(編集部)

COVER STORY

武力では解決できない問題がある

JVCアフガニスタン現地代表兼事業担当 長谷部 貴俊

■診療所を投票所に？

アフガニスタンの国会議員選挙が予定されていた九月十八日の三日前、JVCジャララバード事務所の治安担当スタッフであるサビルラから東京事務所にいる私に突然連絡が入りました。「治安を理由に選挙直前になるまでどこが選挙の投票所になるかわからなかったが、先ほど、我々の運営するゴレークの診療所を投票所にするという通達を受けた。どうする？」

サビルラと私は、すぐに選挙委員会や行政各機関、住民代表に連絡を取り、診療所が投票所になることを回避するように動くことを決めました。女性も患者として来ている診療所を投票所にすることは投票率をあげる狙いがあるのかもしれませんが、実はその時点で、すでにタリバーンを始めとした反政府勢力が、投票日当日の投票所への攻撃を発表していたのです。ゴレークの診療所には毎日百名以上の患者が来ていますが、投票所になることで、攻撃の巻き添えを恐れて患者が診察を受けに来なくなる恐れもありました。

サビルラをはじめとする現地スタッフの努力と住民の協力が実り、投票日前日の夕方に行政

側を説得し、投票所になることを回避することができました。代わりに、休校している学校とモスクが投票所となりました。実際、我々の活動しているナンガルハール県の南部では、タリバーンの攻撃を恐れて投票所が設置できない地域が多くありました。

■止むことのない武力衝突

私たちJVCは、二〇〇一年十月の米英によるアフガニスタン攻撃開始からアフガニスタン

国内での緊急支援活動を、そして現在ではアフガニスタン東部の人口二十万人を越える農村部で地域医療支援、教育支援活動を行っています。JVCは支援と同時に、「この「対テロ戦争」を、現場からの視点とともに「暴力での解決方法はなにももたらさない」として、一貫して批判してきました。実際、〇六年から〇九年にかけて外国軍は六万人増派されたにも関わらず、治安はますます悪化しています。国連の発表によると〇九年の一般市民の被害者数は二千四百十二人で(前年二千百十八人)、その半数以上が反政府勢力による攻撃の被害者です。アフガニスタン国軍、OEFやISAFなどの外国軍の攻撃犠牲

者は五百九十六人、うち空爆三百五十九人と発表されていますが、実際の使者の総数はもっと多いだろうと言われています(国連アフガニスタン支援ミッションより)。今年の五月六月のジャラバード市内の滞在でも、反政府勢力による外国軍やアフガニスタン国軍への攻撃が頻度、激しさを増し、治安状況の悪さを肌で感じました。異常なことが当たり前になりつつある状況なのです。

二〇〇一年以降の生活状況を見た場合、特に教育と保健分野では大幅な改善があったといくつかの国際NGOから報告されていますが、我々の活動地では、慢性的な栄養疾患の住民が多く住んでいますし、特に多くの女性には貧血がみられます。現在JVCは治安上の理由から現地に日本人は駐在していませんが、それでも数カ月に一度の割合で日本人が事業調整と事務運営のためにジャララバードに入っています。一般市民と話す機会はそう多くはありませんが、それでもジャララバード市内に住む人々や活動地の地域代表らと話すことがあります。〇一〇二年ごろは外国軍にもそれほど反発を持っていなかった一般の人々も、今では外国軍

※注① OEF: Operation Enduring Freedom = 「不朽の自由」作戦。2001年10月以降の米英軍によるタリバーンに対する軍事行動の総称。

※注② ISAF: International Security Assistance Force = 「国際治安支援部隊」。国連決議によって設立されたアフガニスタンでの治安維持を目的とする多国籍軍。現在はNATOの指揮下にある。

地域保健医療支援

アフガニスタン東部の村で地域唯一の診療所を運営。また、村人に病気予防の意識を持ってもらうために地域に密着した取り組みを実施している。



■対象者、規模

人口約 21,000 名のナンガルハール県シェワ郡ゴレーク集合村において、地域で唯一の診療所を運営。毎日 100 名前後の患者が訪れる。

また、地域での健康改善に向けた取り組みとして、簡易診療所、地域保健員、保健委員会などを設置・運営している。

■それぞれの活動主体

・診療所（ゴレーク村）

女性医師 1 名、助産師 1 名、男性医師 1 名を含む 8 名の医療スタッフが常勤し、週 6 日間の外来診療を行なっている。部門は一般（内科、外科、小児科など全般）、母子保健（出産介助を含む）、予防接種、検査、薬局に分かれている。他に、診療前の待ち時間を利用した健康教育も毎日行なっている。

・簡易診療所（サブセンター、クズ・カシコート村）

ゴレーク村から離れたクズ・カシコート村に設置。医師を含む 3 名の医療スタッフが常勤し、週 6 日間外来診療全般と母子保健（出産介助を含む）活動を行なっており、毎日 60 名前後の患者が訪れる。診療前の健康教育も実施。

・地域保健員（CHW = Community Health Worker）

診療所のあるゴレーク村以外の村で 100 ～ 150 世帯あたりに男女各 1 名配置されている無償ボランティア（男女各計 16 名）。自宅で簡単な薬の処方や怪我の治療を行なう他、女性の中には出産介助を行なう人もいる。任務開始前に 3 ヶ月の研修を受け、開始後も毎月 JVC の研修やアドバイスを受けている。

・保健委員会（クズ・カシコート村）

地域保健員のいる村内の 3 地区において 6 名の代表（無償）からなる委員会を設立。村の健康改善全般を担うことが期待されている。

に対していい感情を持っていません。「九・一一直後はアメリカがなにかしてくれると期待していた。しかし今はアメリカに反感を持っている。自分たちのアフガニスタン政府はアメリカの言いなりだ」と嘆いています。

外国軍による一般市民の犠牲が多く出ており、不当な家宅搜索が後を経たないことに對する苛立ちが市民に広がっています。最近でも、私の数名の知り合いから、外国軍が急に自宅を襲って、反政府活動に参加したこともない友人、普通に学校に通っていた十代の少年たちを殺して、何の謝罪もないという話を何件か聞きました。

今年初旬からアフガニスタンのヘルマンド県、カンダハール県で外国軍はアフガニスタン国軍とともに大規模作戦を開始しています。外国軍の今年始めに行なわれたヘルマンド県のマージャール郡における大規模作戦を当初、NATO 軍は成功だと宣伝していました。それをアフガニスタン各地で今後実施して治安確保をする。しかし、最近の治安に関する情報によれば、マージャールは非常に不安定だという報告があります。つまり作戦は失敗であり、アフガニスタンの人々は戦いにうんざりして、アフガニスタン政府と反政府勢力側との話し合いを望む声が高まっています。

■あきらめる前に

日本は、これらの地域で行なわれている「対テロ戦争」を、○一年以降アメリカへの協力と

いう形で容認してしまっています。そればかりか、インド洋上での燃料補給のために自衛隊を派遣することで、これに荷担もしていました。攻撃に巻き込まれ家族を失った人々の悲しみはずっと続いています。

日本の市民である私たちは、その声をしっかりと受け止め、軍事や政治と切り離れた人々のニーズに基づく支援が実施されるよう、見守り続ける必要があると思います。

状況は厳しいが、少しずつ改善していける。

今回来日したアフガニスタン人スタッフのシャプール医師に話を聞いた。3年前に活動地を視察していただいたシェア＝国際保健協力市民の会の本田徹医師との医療従事者同士の対談という形をとった。普段なかなかお届けできない現地のスタッフの声をお伝えする。(編集部)



地域保健医療事業シニア・コーディネーター

モハンマド・シャプール・ビスミッラ

74年生、ラグマン県出身。04年に医師免許取得。他NGOに勤務後、05年からJVCに参加、10年より現職。アバシン大学国際健康開発研究科(パキスタン)在学中。

もあるのですが、JVCの診療所のサービスが充実しているからと言えるでしょう。

▼本田・皆さんが行なっている保健教育の中で、家族計画の話もあるようですが、イスラムの文化の中で、家族計画のサービスを導入することに問題はありますか。

▼シャ・家族計画については、産児制限ではなく間隔を空けることが必要だという「バースペーシング」の話を強調しています。基本としては母乳をあげている期間は妊娠を避けられるので(一部の例外を除いて)、それを奨励しています。でも避妊のための注射を希望する人にはそれに対応しています。

▼本田・無料で?

▼シャ・そうです。こうしたサービスは無料で提供するように全国的な取り組みとなっています。資金はNGO持ちですが(笑)。

アフガニスタン政府には保健政策を実行していくための資金がないので、WHO、EU、米国のUSAIDなどが多くの資金を提供しています。

▼本田・現実的にいろいろ対応をされていますね。さらに予防面での活動を掘り下げて聞きたいと思います。皆さんはコニユニティで予防接種の活動を

頑張っていますが、結核やはしかなどについて成果はあがっていますか?

▼シャ・予防接種はポリオ、結核、三種混合など各種やってます。診療所にはワクチン用の冷蔵庫が置いてあり、そこにワクチンを保存しています。また診療所に来れない地域の人々に対しては、我々のワクチン接種員が地域毎にスケジュールを組んで毎週土・月・水曜日の3日間村に向いています。出張サービスでは、アイスバック(ワクチンキャリア)を使っています。経口ポリオワクチンの一回目、BCGは通常出産時に病院で接種するのですが、アフガニスタンでは自宅分娩が多い(おおよそ全体の三分の二)ので、接種の機会を失ってしまいがちですから、地域に出ているワクチン接種員が対応するようにしています。

▼本田・JVCの支援者は、いまだに大変な状況にあるアフガニスタンの活動に大変興味を持って見守っていると思います。今後どのような展開を考えていますか?

▼シャ・我々の政府は、残念ながら保健行政を切り盛りするだけの予算を持ち合わせていません。それどころか政府は我々の

▼本田医師(以下本田)・シャプールさんお久しぶりです。3年前、アフガニスタンの医療活動のレビューに参加させてもらって以来ですね。あの時はとても印象深い旅になりました。あなた方現場の皆さんの活躍に感銘を受けました。JVCのメンバー、支援者を代表して感謝します。今日は最近の活動状況についてお話をうかがいたと思います。

▼シャプール(以下シャ)・3年前、先生に我々の活動を見ていただき、有効なアドバイスをいただいたことをよく覚えてます。あの時はありがとうございます。最近の活動状況についてお話しします。

本田先生が来てくれたとき、

遠方のサルカンドという地域にワクチン接種の手を伸ばすかどうかの議論がありました。当時の判断としては、かなり遠方でもあることや、治安の問題などを考えて見合わせていましたが、その後、通常の活動拠点となっているゴレークの診療所が安定してきたこともあり、ワクチンサービスを始めています。

▼本田・対象地域の人口は二万人ほどでしたでしょうか。外来患者の数は、増えていますか?

▼シャ・JVCは診療所と簡易診療所の二つを運営していますが、中心地から離れた簡易診療所に来る患者さんの多くは(季節によっても違います)活動の対象区域外の村から来ています。近くに他のNGOの診療所



■医療従事者同士ということで話は医療の詳細面にも及び2時間弱の対談となった。



■本田徹（ほんだ・とおる）プロフィール
医師、NPO 法人・シェア＝国際保健協力市民の会・現代表理事。日本国際保健医療学会理事。JVC 会員。シェアでは、主として東ティモールでの保健教育プロジェクトのマネジメントに東京側から関与。日本のホームレス医療にも長く関わり、現在山谷地域でドヤ（簡易宿泊所）の往診や NPO 法人山友会の医療ボランティアとして働く。



■実際に診察を行なうシャプール。



■長谷部が出張してきたときは事務所作業に忙しい。

診療所を選挙の投票所に指定したり、見当違いなことをしたりしている。病人が来る場所がテロ行為のターゲットにされたら大変です。この件については、つい先日 JVC のスタッフが政府と交渉して保健施設をそのように利用しないように申し入れ、投票所リストから除外してもらいました（二ページ参照）。こうした治安対策も私たちの仕事のひとつだと思っています。それからもうひとつの大きな課題は、いまだ医療施設のない遠隔地に暮らす生活環境の厳しい人々にどう目を向けられるかということがあげられます。

▼本田・アフガニスタンの状況を世界の動きと連動させて考えてみたいと思います。たとえば二〇〇〇年に設定された MDG s（ミレニアム開発目標）には「五歳未満児の乳幼児死亡率を九〇年に比べて三分の一にする」という目標がありますが、アフガニスタンではこの目標は達成可能でしょうか？千人のうち二百五十七人の子どもが五歳になる前に死んでいると言われていますが、どうでしょう？

▼シャ・乳児死亡率は残念ながら十年前とあまり変わっていません。その後ちゃんとした調査が行なわれていないことが問題ですが、状況はおそらくもっと悪くなっているのではと思います。その理由として、米軍などによる攻撃が続く治安状況が一向に良くならないこと、また逆に「復興支援」として入ってくる援助が一部の人のだけのものとどまり、貧しいものは引き続き貧しさに苦しむ状況があります。貧しい人は教育を受ける機会もなく、母親が適切に対応できないことなどの悪循環が乳児死亡率の改善を阻んでいます。

▼本田・アフガニスタンの文化でこうした家族の情報が他人に知られることについては問題はありませんか？

▼シャ・その点は特に慎重にすすめました。ファミリーブックの導入に先立ち、地域の長老たちとその意義について話し合いを持つことにしたのです。その結果、長老たちはその意義に賛同し、了解してくれました。

▼本田・最後に、アフガニスタン人と日本人の将来的な関係のあり方について何か期待することがあれば聞かせてください。

▼シャ・今回日本に来て様々なことを学びました。特に患者に対して医師が丁寧に対応されていたことが印象に残っています。その他、教育のことや公害のことなど私が日本から学んだことをアフガニスタンにいる仲間々に伝えたいと思っています。日本の医師が地域に出ていって人々のために活動している姿勢（訪問診療のようなこと）は、アフガニスタンの JVC の活動にも反映されています。このような活動に携われる機会を提供してくれた日本の皆さんに感謝します。実際、私たちの活動地の村の人々も日本人を信頼し、活動を見守ってくれています。

▼本田・先日、昨年末アフガニスタンの診療所を視察したレシャード医師に会いました。彼は診療所の機能を全体としてとても評価していました。いくつかの部分で改善が必要とも言われていました。特に診察の記録がないことをとても心配しておられて、カルテの導入は必要だとおっしゃっていました。

▼シャ・アフガニスタンではカルテを残す習慣がほとんどありません。その時は私たちの診療所にもありませんでしたが、今年に入ってからファミリーブックの導入を始めました。家族単位で一つのノートを作り、診療を受けに来た家族全員の記録が残るようになってます。

村人が信頼し、変わってくることがうれしい。

来日したもうひとりのアフガニスタン人スタッフのファティマにも話を聞いた。インタビュアーは、アフガニスタン事業の保健アドバイザー西愛子にお願ひした。女性同士ということで、アフガニスタンにおける女性特有の困難さや、活動を通しての喜びを語ってもらった。(編集部)



CHW トレーナー兼スーパーバイザー、地域保健促進員
ビビ・ファティマ・カディム・ガヤスディン

65年生、ナンガルハール県出身。高校卒業後、パキスタンでNGO、GTZから裁縫や基礎教育のトレーナーとしての訓練を受ける。06年よりJVCに参加、現職。

▼西・まず同じ女性として聞きますが、毎日の暮らしの中で、特に女性にとって大変なことってありますか。

▼ファティマ（以下ファ）・治安が悪いことです。外出する時、特に活動地の村に行く時に必ずブルカ（頭から身体全体をすっぽり覆うコートのような衣装。身動きがとり難い）を着なければなりません。

▼西・治安が女性の暮らしに制約を与えているということでしょうかね。ではその制約がなくなれば、どうでしょうか。

▼ファ・治安が良くなる頃には自分は年をとってしまうので、今のうちに働けるかどうかかわかりません。でももし治安が良くなったなら、（難民キャンプなど

で学んだことや仕事をした経験から）いろいろな仕事をしてみたいと思います。例えば、様々なことをトレーナーとして教えることができます。今は保健のことを教えていますが、もっと女性たちに服の作り方や刺繍の技術などを教えたり、ジャムやピクルスなど食品加工について教えて、工場やお店を開いてみたいのです。

▼西・先程は女性にとっての大変さを聞きましたが、あなた自身にとって大変なことがあれば教えてください。

▼ファ・やはりブルカを着て移動したり物を運んだりするのがまず大変です。それから、村の女性たちに保健について指導をしています。基礎教育を受け

ていない人がほとんどなので、なぜ手を洗わなければならないのかなど、ひとつひとつのトピックを理解してもらうのにも骨が折れます。

あとは、（事務所のあるジャラバード市内から）村までの道が舗装されてなく、続けて村に通うととても大変です。もうひとつ、今回日本に来ることは家族や親戚以外には伝えていません。あとはJVCのスタッフだけが知っているくらいです。

▼西・そうした中で来日してくれてありがとうございます。話題は変わりますが、九・一一以降アフガニスタン国内はどう変わったと思いますか。

▼ファ・状況は、日ごとに悪くなっています。しかし、将来には復興が進み、戦いの無い国になってみんなが平和に暮らせるようになりたいです。

▼西・いわゆる地域開発の仕事に関心をもちようになつた経緯を教えてください。

▼ファ・アフガニスタンの人たちの大変な状況を見て、自分の能力を活かして何かしたいと思いました。サラリーのことばかり考えていません。

▼西・どのようにして地域保健指導員の技能を身につけたのか教えてください。

▼ファ・パキスタンとの国境にある難民キャンプでGTZというドイツの開発援助組織のトレーニングを受けました。その時の代表がとても優秀な人で、毎回活動現場からもどると話し合いをもって指導や助言をしてくれ、そこから学びとることができました。

▼西・JVCに来たきっかけはなんですか。

▼ファ・パキスタンから難民が帰還し始めた頃国内の援助活動も増え始め、JVCがスタッフを募集していることを当時JVCのスタッフだった知人のハヤトラ医師から聞きました。

▼西・JVCと他のNGOと何が違うかと思っていますか。

▼ファ・ジャラバードで他のNGOで働いたことが無いので比較はできませんが、JVCは女性スタッフへの配慮があつて守られている感じがします。それとスタッフがあフガニスタン人も日本人もみんな良い人たちがかりです。私の義理の姉が最近他のNGOに用事があつて事務所に行ったそうなのですが、人の顔をじろつと見て他の日に来てくれと冷たくされたそうで感じが悪く二度と行きたくないといいました。

良い人であることは、大事な



■ JICA 地球ひろばでは、多くの参加者の前でほとんどはじめての講演を行なったファティマ。活動説明の時は緊張した様子だったが、文化紹介の時には一転笑顔になってブルカのかぶり方を実演してくれた。



■西愛子（にし・あいこ）プロフィール
50年生、鹿児島出身。72年京都府立医科大学付属看護学院卒業。看護師、英語講師、会社員などを経た後、92年よりJVCカンボジアに赴任。以後JICAカンボジア、JVCベトナム、JVC東京で勤務。07年より嘱託としてJVCアフガニスタン事業に関わる。



■地域保健員に熱の測り方を身振りで示すファティマ（左）。



■谷山由子（右）と打ち合わせ中。

ことです。村の中でも、態度の悪い人は働けません。一人でもそういう人がいたら、そのNGOに影響が及び私たちは村の中では活動できなくなります。ですから、常に注意深く人と接しなければいけないのです。

▼西・これまでの仕事の中で、どのような変化が見えてきましたか。

▼ファ・人は簡単には変えられません。この仕事を十六年やってきましたが、そう思います。忍耐が要ります。

▼西・JVCに関わってからの五年間で、村人は変わったと思いますか。

▼ファ・一緒に村で協力してくれている（村のボランティアの）地域保健員たちが、最初の

頃「JVCは国際NGOなのだから自分たちにサラリーを出してくれ」と言い続けていました。サラリーが受け取れないとわかった時には、JVCのシャブル医師が横取りしているのだらうとまで言われました。ですが、最近ではボランティアとして働けることをとても喜んでいて、頑張ってくれています。私が担当しているのは女性の地域保健員だけなので、その限りではありませんが、このように変わってきています。

▼西・村人はどうですか。

▼ファ・村の女性の話ですが、以前は髪もとかさず身だしなみを気にしていなかった人が、「母親教室」で保健の指導を受けてから髪をとかし身のまわりを清

潔にするようになりました。また二年前のことですが、クス・カシコト村で子どもの手が荒れてひび割れているのを見かけ母親に声をかけると、貧しいから何の手入れもしてあげていませんでした。すぐにワセリンをわたすと、それ以降きれいになっていました。

▼西・村で活動をしていてうれしいことありますか。

▼ファ・JVCに入って村で活動を始めたばかりのころは私のことを村人は誰も知りませんでした。今は村の人たちが一目置いてくれ信頼してくれるようになりました。このように自分が信頼され期待してくれる人たちがいる場所があるので、二カ月前に他の職場から声がかかりましたが断りました。

▼西・JVCに残ってくれてありがとう（笑）。これまでの中で忘れられない良い思い出はありますか。

▼ファ・活動の最初の頃、地域保健員たちに対して基礎教育も受けていない状態から初期トレーニングをしたのですが、居眠りをする人もいて、この先どうなるのか、この人たちを変えられるのかと心配になりました。しかし、今はそれを乗り越えて地域保健員たちを育てるこ

とができました。みなさん、活発に活動しています。村の中で指導をするコツは、村の女性たちが一番関心のあることを見つけてそれを取り上げ関心をひきつけることです。

▼西・今のアフガニスタンに、ファティマさん自身ができることは何だと思えますか。

▼ファ・病気予防です。そのための保健教育です。その家の中に、その問題の根源があります。ですから保健教育はとても重要だと思います。そのためにも、今の活動を継続していくことが大切だと思います。

▼西・最後に今回の日本訪問の印象と、日本の、特にJVC会員のみなさんへのメッセージをお願いします。

▼ファ・日本に来て良かったです。最初は何が学べるのだろうかと思っていました。いろいろなことが学べました。例えば、乳幼児検診と同時に母親も健康チェックを受けることは、私たちの診療所でも必要なことだと思いました。

アフガニスタンの貧しい人々、サポートが必要な人たちのためにぜひ支援を続けてください。サポートがなければ、忘れられてしまったら、彼らは暮らしていけないのです。

異なるからこそ、わかることがある。

アフガニスタン事業保健アドバイザー 西 愛子

今回の出張では、アフガニスタン人二名は関東だけでなく鹿児島県出水市の医療施設を訪問見学した。保健アドバイザーの西の地元であると同時に、農村部における保健医療の実際を見てもらうためだ。この4日間の鹿児島訪問を、受け入れてくださった方の視点からまとめておく。(編集部)

出水市保健センター次長・原口栄子氏(保健師)には、今回の受け入れに対して計画の段階からさまざまな助言やご協力をいただいた。受け入れが終了した後、以下のような感想をいただいた。

「依頼を受けた時には突然かつ初めてのことであり、なぜ出水市なのか、外国の人に見てもらえるだけのものがあるのかと大きな戸惑いを感じた。しかしながら西さんの話を聞き、日常の活動を見ていただければいいと判断して受け入れることとした。幸い、定期複合健診などの現場での活動のある日に日程を合わせていただいたので、活動の現場を見ていただくことができた。

出水に到着された直後に出水市長に会っていただいたが、その時フアティマさんが緊張している様子だったので、ちょっと不安に思ったが、翌々日、検診を見学に来られた時には表情も和らいでいたので安心した。

こちらはアフガニスタンのことをまったく知らずに対応したが、案内している途中で妊産婦死亡率が出生十萬当たり千六百(日本は〇四年時に同四・四)と聞き大変驚いた。もう少しアフガニスタンの話を聞く時間を設ければよかったと残念に思った。こちらでご覧になったことが今後のアフガニスタンの発展にわずかもお役に立てば大変光栄である。私たちもこの大変希少な経験を通じてさまざまな

ことを学ばせていただき、ありがとうございました」

◎ 出水市野田医療センターの内村忍所長(医師)と奥園信子看護師長は、八件の訪問診療見学を通じて、日本の医療事情の一端のみならず、民家や家族事情を学ぶ貴重な機会を提供してくださった。お二人の献身的な態度にシャプールとフアティマの両名も大きな感銘を受けていたが、ご高齢の患者さんの多くがひとりまたは夫婦のみで生活している状況には複雑な思いを抱いたようだった。見学後、内村所長から以下のようなコメントをいただいた。

「日本もかつて国内で争っていた時期があり、大きな損失で

あった。争いは何も生まない。アフガニスタンも一日も早く争いをやめ、復興に力を尽くしてほしい。日本とアフガニスタンは事情が違うだろうが、今回の訪問が何らかの参考になることを心から願っている」

◎ 出水市の隣には水俣市があり、過去の日本において社会的問題としての公害があったことを知ってもらうため、最終日に短時間だが水俣病資料館を見学した。見学後にシャプールが「アフガニスタンは豊富な地下資源を有しており、今後開発が進むにつれて、いずれ同じような問題が発生するかもしれない」と語った。その予感がはずれてくれることを願ってやまない。

■来日スケジュール

9月15日	鹿児島県出水市 渋谷俊彦氏 表敬訪問
16日	出水市総合医療センター 見学 出水市野田医療センター 診療見学
17日	出水市保健センター 複合検診見学、3・4ヵ月児検診見学、6・7ヵ月児検診見学、両親教室見学
18日	水俣市立水俣病資料館 見学
20～22日	JVC 東京事務所 で打ち合わせ
23日	WE21 ジャパン で報告会
24日	JICA 地球ひろば で一般向け報告会



■3ヵ月児検診の身長測定を見学する。



■在宅診療の患者さん宅にて内村医師から話を聞く。

「MDGsは貧困を解決するのか ～地域と環境の視点から～」

タイ事業担当 宮田 敬子

二〇〇〇年にMDGs（ミレニアム開発目標）が設定されて、今年で十年となります。二〇十五年までにMDGsに掲げられた目標を達成すべく、世界中で様々な取り組みがなされています。しかし、世界の貧困の根本的な原因を探らなければ問題の解決には至りません。そこでJVCは「MDGsは貧困を解決するのか」と題したシンポジウムを九月十八日に開催しました。パネリストとして元JVCラオス現地代表の新井綾香氏（現セーフ・ザ・チルドレン・ジャパン）、スロー運動の拠点となるカフェスローの代表を務める吉岡淳氏、JVC調査研究・政策提言担当の高橋清貴が登壇し、それぞれの立場でMDGsについて語りました。

MDGsの対象は、私たちがもつと向きあっていたいかなくはならない世界の問題です。しかし、その取り組みが誰によって誰のために実施されているのかをもっと考えなくてはなりません。例えば、今回の事例にあげられたラオスの村人は、MDGsとは何かをはたして知っているでしょうか。それぞれの土地に暮らす人々の思いが貧困削減に反映されていくことは難しいのでしょうか。今回のシンポジウムでは、NGOの支援のあり方も同時に問い直されたように思いました。

1 誰のための「貧困撲滅」なのか

セーフ・ザ・チルドレン・ジャパン

新井 綾香

ラオスの人々は森の自然資源を得て暮らしており、これを現金換算すると年間二百八十ドルの収入になるとされています。しかし、この収入は経済指標には反映されず、ラオスは最貧国に位置づけられています。MDGsに協調する形で作られた政府の貧困撲滅政策の下、ダム建設や植林事業などの開発が急速に増えました。こうした開発は、村人の貴重な食料の採取場所である農地や共有林を奪う一方、村人の利益がごくわずかであるケースもあります。貧困撲滅政策の主役は本来は村人自身であるはずですが、そこに十分な利益が届いていないという意味において疑問を感じずにはいられません。MDGsを進める国際社会は、この構造そのものをレビューする責任があるのではないのでしょうか。

2 自分の豊かさを振り返る

カフェスロー代表

吉岡 淳

大量生産・大量消費によってもたらされた便利さや快適さを考えるときに、それと同時に貧困問題が引き起こされていることを私たちは知らなければなりません。八〇年代以降、途上国への支援が始まった一方で、「開発」と称される途上国への進出は続いてきました。海外への支援には、私たち自身の生活のありようが深く関わっています。途上国の支援を考えると同時に、私たちは自分たちの豊かさをもう一度問い直すなくてはなりません。MDGsを批判するだけではなく、自分たちの提案をいかに出せるかが大切です。また、教育や貧困の問題は途上国だけでなく、先進国を含む世界中の国々が直面している問題ですから、自分の国の問題についても考えていく必要があるのではないのでしょうか。

3 問題を断片化せずに取り組むことを

JVC調査研究政策提言担当

高橋 清貴

途上国で起こっている様々な問題は相互に関連しているにも関わらず、MDGsは問題を断片化させ、その一つでも達成できればそれが成果とされようとしています。果たしてそうなのでしょうか。私たちの生活は様々な事柄が複雑に絡み合っているように、MDGsに提示されているような問題を個別断片的に捉えて達成しようとしても、問題の根本は解決されません。セーフティネット、幸せの価値観、人権や人生の生き方などをもっと重要視すべきではないのでしょうか。また、MDGsは地域社会の重要性にふれておらず、国家中心であり、経済成長主義から脱却できていません。また、都市生活者中心の視点から問題解決が図られています。もっと農村のあり方を視野に入れることが重要です。

結婚しないにはわけがある？

スーダン現地代表 今井 高樹



いい歳をして独り身でいる私に、スーダンの友人たちは驚きを隠さない。道端のお茶屋でハイビスカス茶を飲みながら隣のオジサンと話していたら「どうして結婚しないんだ？俺なんか嫁さんが7人もいるぞ」と目を丸くしていた。これが日本だったら「嫁さん7人」にみんな目を丸くするだろうけど…。

一夫多妻の是非はさておき、友人たちの口から次に出てくるのは「ヨシ、まかせとけ。俺が嫁さんを探してやる」の一言。でも、幸か不幸か、本気で私をスーダン女性に引き合わせてくれた友人はひとりもない。

おかげで困った立場に立たずに済んでいるのだけど、ちょっと残念(?)。

自分が「結婚しない(できない)」ことを正当化するために、それが昨今の日本のトレンドだと私が説明すると、これまたみんな目を丸くして「理由は？」と聞く。労働時間が長いとか、理想ばかり高くして妥協しないとか、色々理由を並べて、最後に「今の日本は働いても十分な収入を得られない人が増えていて、結婚を躊躇している」と話したら、ある友人にこう言われた。「なんて国だ!？スーダンは貧乏人でも結婚できるぞ」貧乏だと将来の不安ばかりが先

に立って結婚できない国と、貧乏でも気にせず明るく結婚できる国。どっちが幸せなのか。

しかし、スーダンの文化は多様だ。先の友人は北部出身だが、「嫁さん7人」のオジサンは南部出身で、こちらの言うことは全然違う。「財産がなければ結婚できないぞ。俺は7人の嫁さんもらうためにウシを700頭も払ったんだ(彼の民族では花嫁が花嫁の家族にウシを贈る)。おまえ、財産あるのか?」

そうか、今度「なぜ結婚しないのか?」と尋ねられたら「実はウシを持っていないくてね」と答えよう。

『ビルマ VJ』 消された革命

監督：アンダース・オステルガルド／デンマーク／85分



(c) 2008 Magic Hour Films

映画『ビルマVJ』は、そんな忘れかけていたあの時の記憶を呼び覚ましてくれた。第八十二回アカデミー賞長編ドキュメンタリー部門にノミネートされた本作は、VJ(ビデオジャーナリスト)たちが撮影した二〇〇七年九月の反政府デモの記録である。断片的な映像のコレクションが、デモ行進と政府軍の対立を生々

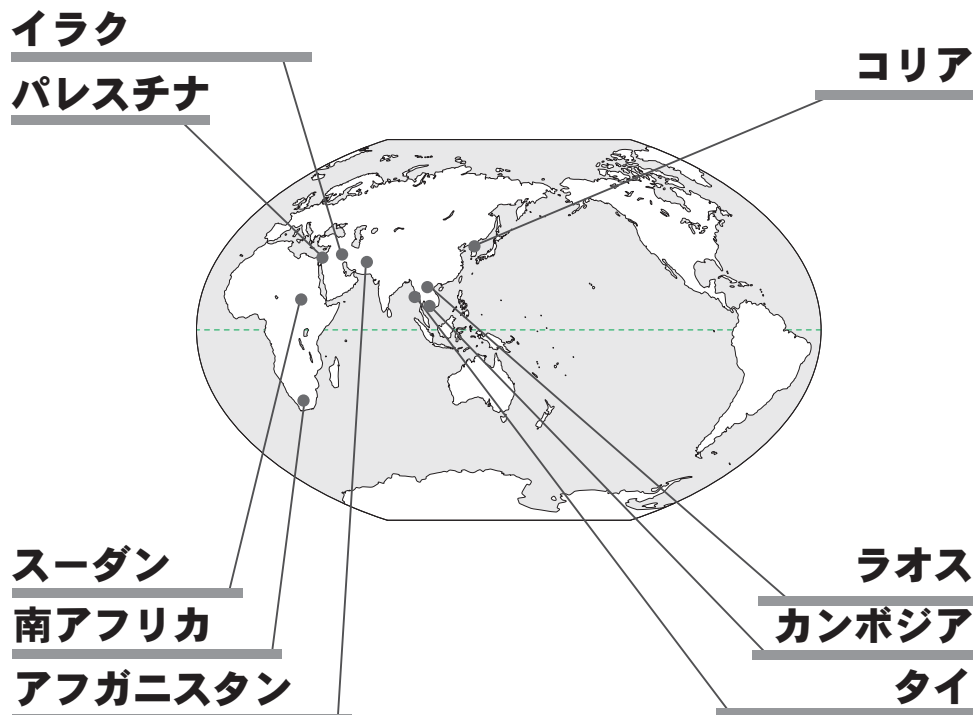
二〇〇七年九月、ジャーナリストの長井健司氏が反政府デモ取材中にミャンマー政府軍兵士の銃弾に倒れた。日本国内でも大きく取りあげられ、民主化を希求するデモ行進を見て、軍政権下で苦境に立たされる市民がいることを知った人も多いと思う。この悲しい事件によって私たちの眼は一時的にミャンマーに向けたが、時を経ることに、多くの眼差しがまた別の関心に移ってしまったように思う。

私はこの反政府デモの結末を知りながら、映画の進行と共に、事実とは反する結末を予感してしまった。それは、この映画が「ジョシュア」という一人のVJの視点から描かれていたからだろう。架空の人物ともとれる「ジョシュア」を配置することで、ドキュメンタリーの隙間にフィクションを埋め込み、現実の結末を覆す民主化実現の高揚感をもたらしたのだ。

副題である『消された革命』は、二十年越しに起きた民衆運動が軍政に潰されたという事実。しかし、この映画に埋め込まれたフィクションは、またいつか起こる「革命」を予感させた。(タイ事業担当 下田寛典)

みるよむきく

JVC は、現在 9 の国 / 地域で活動しています。



カンボジア

■生態系に配慮した農業による生計改善 (CLEAN)

07 年からシェムリアップ県東部で活動を行なっている。ビデオ上映会や SRI 基礎研修が引き続き行なわれている。日本からの教職員組合や大学の訪問を受け入れた。9 月に試験農場運営を開始し、スタッフによる田植えが行なわれた。

■環境教育

09 年 4 月からシェムリアップ県東部の小学校で実施している。図書館マネジメント研修を教師を対象に行ない、全学年のカリキュラムが作成された。学校田では SRI 研修を CLEAN スタッフと協働で実施した。大学などのスタディーツアーを受け入れ、ニュースレター第 1 号を発行。

■資料・情報センター (TRC)

持続的農業、農村開発、環境に関する資料を 94 年から提供している。パンフレットの内容を刷新した。農業関連の TV プログラムや DVD などの購入を検討中。TRC オリエンテーションは 9 月以降毎月実施する予定である。

■技術学校

85 年に政府と合意し、プノンペンで職業訓練校と付設整備工場を運営している。毎月 100 台を超える修理受注があり、経営は安定しつつある。卒業予定者の就職はほぼ全員決まっている。(以上山崎)



■日本から訪問した先生の授業で花を観察する子どもたち。

ラオス

■森林保全／農業・生活改善事業 (サワナケート県)

農業では、5 月より順次貸し出しが行なわれてきた米銀行で、8 月までですべての貸し出しが終了した。SRI、養魚では、実践農家のフォローアップを実施、また、家畜のワクチン投与も行なった。9 月には JVC カンボジア事務所を訪問し、SRI などの農業活動について現場視察／意見交換を行なう貴重な機会を持った。9 月にはスタッフの発案で井戸の修理技術研修にも着手した。

森林チームは、ラオス国立大学の法律教育チームを招聘して、長期にわたって村に入り、法律研修を行なった。また、7 月にはタイでの国際会議にグレンが、8 月にはサラワンでの南部ネットワーク会議にペダワンが、それぞれ出席し、ラオスの土地森林問題の現状や、JVC の活動について発表した。

農業／森林チームともに、7 月下旬よりこれまでの活動についてデータを収集、8 月上旬に中間評価を実施、県・郡農林事務所とも会議を持った。この結果に基づき、その後実施された半期会議等の場で今後の事業実施の改善策について内部で検討するとともに、県・郡の農林事務所とも再度会議を持った。(平野)



■県・郡農林事務所との会議。

スーダン

■現地政府との合意書を締結

南北内戦終結後の06年に難民帰還支援として南部でスタートしたJVCスーダン事業は、難民支援がほぼ終了したのを受けて、今年から活動地を南北境界付近の南コルドファン州に移している。同州は、和平合意で「暫定統治地域」と規定され中央政府（北部）と南部自治政府とが共同統治を行なっているが、行政区分では北部の一州とされる。9月上旬に新たに中央政府への登録と事業実施合意書の締結が完了した。今後、現地事務所を開設し、平和構築・地域開発事業を開始する予定である。

この間、南部スーダンのジュバにおいては、スーダン教会評議会（SCC）に運営を移管した元JVC車両整備工場を訪問し、会計業務などについてアドバイスを実施した。移管後すでに数ヵ月が経過し、課題はありつつも工場は独立採算での運営を続行中。職業訓練（整備士養成）も継続されており、元国内避難民など10名の若者が学んでいる。

南部の独立住民投票は、準備作業の遅滞が指摘されながらも、和平6周年にあたる2011年1月の実施に向けて動いている。10月から有権者登録が開始される見込み。投票では独立の可決が予測されるが、一部未確定の南北境界線、北部に居住する南部出身者の市民権の扱い、石油収入の分配など「独立」に向けては様々な問題が山積している。

（今井）



■ SCC 車両整備工場（元 JVC 工場）で研修に励む若者。

南アフリカ

■ HIV/エイズ(リンボポ州)

農村での HIV/エイズの治療に関する研修、栄養改善のための菜園づくり研修、患者や孤児へのケアを行なっている。7月24～8月5日に、HIV/エイズ政

策や有機農業、HIV陽性者自身による活動について学ぶためのタイへのスタディツアーを実施した。現地協働 NGO の在宅介護ボランティアや HIV陽性者など活動関係者7名が参加した。帰国後、これまで菜園をつくっていなかった陽性者が菜園をつくり始めるなどすでに変化が現れている。8月末および9月中旬に、09年度以降の活動の評価を実施し、HIV陽性者自身がこれまでの研修を活かして予防啓発活動を担い始めているなどのインパクトが確認された。

■地域住民を対象とした菜園研修(ハウテン州ソウェト地区)

ジョハネスバーグ市の南西にある旧黒人居住地区・ソウェトにて中学校の敷地を利用した地域住民対象の菜園研修を実施している。7月下旬の研修では、6月の研修で植えた苗やコンフリー（栄養価に富んだ植物で有機堆肥や土を覆うマルチに使える）が霜によるダメージを受けていたため、これらを範囲を広げて植えなおす作業を行なった。また09年6月の研修開始から一年が経過し、参加者がこの間を通じて学校／家庭菜園から継続的に何らかの野菜を収穫できていることが確認された。8月16～18日には、7月に植えた苗の移植とコンフリーを使ったマルチ（土を覆う）などの作業を行なった。（以上渡辺）



■ タイのエイズ治療薬について説明を受ける参加者。

イラク

■地域社会再生のための活動支援

多民族が集住し、また石油資源を巡り紛争のリスクを抱えるキルクークで、地域住民の話し合いで相互理解を進め、対立を防ぐ活動を行なうイラクのローカル NGO INSAN の活動に協力している。この地域の様子を知るため、キルクーク市ラパリーン地区の「地域委員会」のメンバーとの面談を、比較的治安の安定している近接地である北イラク、クルド自治区のスレイマニヤで8月10日に行なった。

同じくキルクークで、出身民族の異なる子どもたちを対象にアートワークショップを行ない、子どもたちの相互理解から始め、地域の人々の相互理解を狙う「子どもたちとつくる地域の平和」プロジェクトを開始。9月1日より週2回×8週間＝計16回のクラスを実施中。（原）



■ キルクーク市地域委員会メンバーとの面談。

タイ

■農村派遣研修

農村派遣にどのようなものが求められているのかを把握すべく、アンケート調査を実施。（宮田）

■若手農民交流

2月のタイツアーに参加した若手農家が活動する島根県弥栄町を訪問し、その現場を見学と、11月に企画しているタイへの稲刈りツアーの打ち合わせを行なった。（宮田）

■南タイでの在タイビルマ人医療支援

ミャンマー／ビルマとの関わりを検討するために情報収集を実施中。その一環として、7月に清水（JVC事務局長）、金（JVC理事）と共にタイを訪問した。ミャンマー／ビルマと国境を接するメーソットと、現在医療支援を行なっているパンガー県を訪問し、NGOやビルマ人から聞き取りをした。これまでの経験やアクセスなどを踏まえ、パンガー県で新たな活動を検討していく方向性を確認した。（下田）



■ 南タイで JVC と共同で医療支援を行なう FED から話を聞く清水と金（左2名）。

パレスチナ

■ガザ栄養改善支援

ガザの幼稚園児約 320 名に西岸ヘブロン産牛乳とラマッラー産ビスケットを配布する栄養改善支援事業は、6 月から 9 月中旬まで幼稚園が夏休み。ハンユニスの栄養センターでは栄養失調児に対して栄養価の高いセモリナ粉や豆など家庭への持ち帰り用乾燥食材を配布。また、同センターのボランティアの地域活動を視察した。



■母親たちに乾燥食材の使い方を説明する栄養指導員（右）。

■健康教育・巡回診療支援

現地の医療 NGO と協力し、エルサレムの壁の両側の学校や幼稚園などで健康診断、保健教育などの巡回診療活動を実施。夏休み中は各地でサマーキャンプが開かれ、応急処置などに関する授業を保健指導員たちが行なった。

■収入創出支援

ベツレヘムの難民キャンプ内のハンダラ文化センター女性グループの刺繍プロジェクトを支援。在庫商品の生産管理を自分たちでできるようになってきた。リコーテクノシステムズの協力によるバッグ製作、アユス仏教国際ネットワークの協力による平和念珠作りも継続中。

■平和創造・平和構築

東エルサレムで女性たちのエンパワーメントを目指したプロジェクトを実施中。2 つの地域で集まって共通の問題について話しあい、それぞれアジェンダを作成した。西エルサレムでも同様の問題を抱え取り組む女性たちの団体との共同活動へ向けて打ち合わせを持った。(以上福田・津高)

アフガニスタン

8 月上旬、隣国パキスタンと国境を接する活動地が洪水の被害に遭い村道の一部が寸断された。その影響で、約 2 週間診療所は徒歩で通える男性スタッフのみで運営した。



■診療所の入り口で家族単位のカルテを受け取る女性患者。

■女性と子供の健康改善のための地域保健医療事業

病気予防の意識を高めるため、クズ・カシコート村の保健委員会と協力して村人の塩・砂糖・油脂類の摂取量について聞き取り調査を行なった。データを整理して結果を村人と共有し、具体的な予防の取り組みにつなげる。また、活動地の死産・周産期死亡を把握するための聞き取りも開始した。診療所では洪水の影響もあり下痢の患者が例年より増えており、9 月 10 日にはカチャラ村で 10 件が発生し 2 人が重症下痢のため診療所で受診した。

■教育支援活動

ゴレーク地域の学校の夏休み期間にあたり、保健担当教員を対象とした健康教育ワークショップや、中高生対象の健康をテーマにした作文コンクールの準備を行なった。

■政策提言

ジャララバードで定期的に民軍調整会議が行なわれていたが、NGO が直面する問題に適宜対応できる場の必要が高まったため、NGO の協議体である ACBAR と国連人道問題調整部 (UNOCHA) と国連アフガニスタン支援ミッション (UNAMA) で話しあい、非定期のタスクフォースとして新たに軍と調整する委員会が設置された。(以上谷山由)

調査研究・政策提言

■DAC ピアレビュー NGO 内部勉強会

8 月 6 日に早稲田奉仕園で JANIC 主催の DAC ピアレビュー NGO 向け内部勉強会が行なわれ、高橋が講師の一人として参加した。DAC に加盟する援助国同士でそれぞれの ODA を評価するピアレビューは毎年行なわれているが、昨年は 6 年ぶりに日本の ODA が対象となり、今年 5 月にその報告書が公開された。これを受けて、NGO として報告書から見えてくる ODA の課題と今後の取組について話しあった。

■CSO ネットワーク連続セミナー「バリューチェーンで考える持続可能な社会」

8 月 16 日に環境パートナーシップオフィスで行なわれた標記セミナーに高橋がスピーカーの一人として参加した。環境や人権、労働環境を守るとは企業という組織体の根幹にあるべきであり、その価値の社会への浸透を「バリューチェーン」と言われている。高橋からは、ラオスで王子製紙が行っていた商業植林の問題を事例に、一方的ではない双方向的なバリューチェーン、企業が地域社会と学びあい、対話することの重要性を指摘した。(以上高橋)

コリア

■絵画交流『南北コリアと日本のともだち展』

日朝関係の悪化により平壤での絵画展示が難しくなっていた以降、東京・平壤・ソウルをつなぐ子どもたちの共同制作に取り組ん



■共同作品に自身の自画像を貼り付けていく子どもたち。

でいる。今年は、原案を作成された絵本作家の浜田桂子さんとともに訪朝、平壤市ルンラ小学校で作品づくりに取り組んだ。日本からは東京の朝鮮学校に通う 5 名、ルンラ小からは 15 名が参加。浜田さんの絵本の読み聞かせ、龍岳山へのピクニックなど、楽しい時間をともに過ごしたあとの製作となったため、のびのびとした絵が仕上がった。

平壤から作品をもらって展示を始めてから今年で 10 年目。ルンラ小学校の安校長先生は「続けてきて良かったのは、日本そして韓国にまで朝鮮の子どもの心を絵で伝えられたこと。子どもたちの明るい姿をもっと多くの人に知ってもらえることが、関係改善につながる」と話された。(寺西)

ボランティアの心と

聖書の言葉

△千葉県△ 岩浅 紀久
いづみあさとしりき

私が東エルサレムを訪問したときのことです。ある日、イスラエルの国旗を立てた車が、スピーカーで何かを叫びながら通りました。隣りにいたパレスチナ人に尋ねると「パレスチナ人は、この地域から二時間以内に立ち退くようにと言っている」と言うのです。身のまわりの荷物を持った住人が、通りへ出てきます。きつかり二時間後、十台のブルドーザーと数台の戦車がやってきて、家々を次々と壊して行きました。抗議の叫びは轟音に

国内ひろば

JVC network

かき消され、パレスチナ人の家族は、涙を流しながら瓦礫の山に別れを告げて去って行きました。私は茫然と立ちすくんでしまいました。聖書には、追剥に遭って半殺しの目にあいながら、無視されたり避けられたりした旅人を、一人のサマリア人が助ける話が出てきます。イエスが「怪我人を避けて通った祭司、レビ人、助けたサマリア人のうち、誰が旅人の隣人になったか？」と律法学者に問いかけます。「助けたサマリア人です」との答えに、イエスはすかさず「行って同じよう

にしなさい」と話します（ルカによる福音書十章二十五〜三十七節）。領土を、仕事を、自由を奪われ、時には命の尊厳まで脅かされているパレスチナの人々を黙って見過ごすのは、祭司やレビ人と同じではないか？『行って同じようにしなさい』という言葉が、私の頭の中で何度も行き交いました。しかし、私たちができることは、一体何だろうか？そこで出会ったのが、パレスチナの現場で様々な活動をされているJVCでした。日本では、パレスチナに限らず、世界の様々な現場の課題を知らせるセミナーなどが開かれていました。単純に、そこで困って苦しんでいる人を見捨てて置けないという自然な隣人に対する思い。その活動の精神と、聖書の言葉は、私の中でとても一致するのです。まだ、あまりお手伝いしない事はできないけれど、周りの人々に訴えて資金援助をするのも具体的な方法かもしれないと考え、ガレッジセール等をして資金集めをしています。昨年からお仲間に入れていただいている、ちよっと年配のニューフェイスです。

12月はJVCのコンサートへ！

ー 今年のクリスマスは本場のバロック音楽をー

JVC コンサート事務局 高杉 香織

「歌声で国際協力に参加しましょう」と、毎年春に合唱団員を募集し、12月の公演にむけて練習を重ねているJVC合唱団。自主公演も大成功のうちに幕を閉じ、JVCコンサートに向け練習を開始している大阪の合唱団コードリベット・コール。東京でも大阪でも多くの方々を支えられ、今年もJVC国際協力コンサート開催の準備が進んでおります。

先月、指揮者・ソリストの方々から「12月にすばらしい音楽を皆様と一緒に作り上げることをとても楽しみにしています」「皆様と一緒に音楽会をひらくことを心より楽しみにしております」と温かいメッセージが届きました。

このコンサートはJVCの活動が続く限り続く、日本での大事なJVC活動のひとつです。日本人が日本でできる国際協力は？そのひとつにこの「音楽を通した国際協力」があります。

また、ロビーでは休憩時間にクラフト販売も行ないます。クリスマスプレゼントのお買い物も一緒にいかがでしょうか。JVCの活動への想い、世界への想い、そしてもちろん歌の持つ想いがひとつになってクリスマスにすばらしい音色を奏でます！会場でお会いできることを楽しみにしております！



■指揮者：ポール・ボリヴニク。ニューハンプシャー音楽祭の音楽監督を務める。

公演情報

第17回大阪公演

バッハ『クリスマス・オラトリオ』

2010年12月4日(土)16時開演 いずみホール

第22回東京公演

ヘンデル『メサイア』

2010年12月11日(土)15時開演

昭和女子大学人見記念講堂

チケット購入はコンサート事務局までご連絡ください。

募金にご協力ありがとうございます

JVC の活動は、皆さまの募金に支えられています。
JVC への募金は税制優遇措置を受けることができます。

① JVC 募金 (郵便振替)

JVC の各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495
加入者名：JVC 東京事務所

7 月計 807,711 円
8 月計 987,183 円

	7 月	8 月
無指定	134,250 円	22,387 円
タイ	0 円	0 円
カンボジア	117,175 円	15,400 円
ラオス	103,750 円	28,300 円
南アフリカ	62,000 円	18,762 円
パレスチナ	232,780 円	760,072 円
アフガニスタン	90,000 円	17,500 円
コリア	0 円	0 円
イラク	57,556 円	118,500 円
スーダン	10,200 円	6,262 円

※上表には「夏の募金」は算入していません。

② 犬養道子「みどり一本」募金

JVC 活動地での環境保全活動に使われます。

口座番号：00100-8-212497
加入者名：犬養道子「みどり一本」

7 月計 135,500 円 / 16 件
8 月計 71,946 円 / 12 件

③ JVC マンスリー募金

銀行や郵便局の口座、クレジットカードから自動引き落としできる手軽な募金方法です。

7 月計 2,027,650 円 / 1,722 件
8 月計 2,059,950 円 / 1,729 件

編集後記

今夏、十数年ぶりに青春 18 キップを購入。主な目的は東静岡駅前の実物大ガンダムを見るのと、サッカーのアーウェー観戦@岐阜。これだけでもとは取れたので、余った分で日光へ。東照宮や二荒山神社などベタなところを回ってきた。陽明門のあきれほどの豪華さと、眠猫から奥宮までの路の、空気の密度がちょっと薄いとを感じるような清廉さと。元気をもらいました。(H)

JVC
協賛

第 4 回 国際有機農業映画祭

日時：2010 年 11 月 27 日 (土) 9:00 開場 9:30 開演
場所：国立オリンピック記念青少年総合センター
カルチャー棟 大ホール (東京・代々木)



JVC が第 1 回から協賛しています国際有機農業映画祭が、第 4 回を迎え、11 月 27 日 (土) に開催されます。今年のテーマは『たね・水・いのち』。朝 9 時 30 分から別表にある 9 本の有機農業、自然環境、環境破壊、農業づくりに関する内外の映像が上映されます。チケットは一般 2,000 円、若者 (25 歳以下) なら 1,500 円。公式サイトから申し込みます。

公式サイト：http://yuki-eiga.com/

■上映プログラム

9:30	『アフガンに命の水を ～ペシャワール会 26 年目の闘い～』 (2009 年 / 日本)
10:50	『ミシシッピ』 (2009 年 / アメリカ)
11:22	『海と森と里 つながりの中に生きる』 (2010 年 / 日本)
13:00	(3 分ビデオ)
13:30	『「緑の革命」光と影』 (1992 年 / インド)
15:00	『パーシー・シュマイザー、モンサントとたたかう』 (2009 年 / ドイツ)
16:25	『種を採る人』 (2009 年 / 日本)
16:56	『雑草』 (2008 年 / 韓国)
17:55	『水俣の甘夏』 (1984 年 / 日本)
19:10	『田んぼは僕らの教室だ!』 (2009 年 / 日本)

2010 年夏の募金にご協力ありがとうございます。

記録的な猛暑となった日本の夏でしたが、JVC の各活動地の人たちのことを考えて「いやいや、こんなことでヘコタれてはいかん」と自身を奮い立たせつつ、そのような中でも皆様からの多くのご支援をいただけるありがたさで、なんとか乗りきることができました。ありがとうございます。

2010 年夏募金集計 (郵便振替分：9 月末時点)

1,042 件 7,098,318 円

- ・活動国を指定された募金は上記に含まれません。
- ・上記夏募金の金額は、ページ左上の JVC 募金の欄には含まれていません。
- ・募金額の 20% は管理費とさせていただきます。

JVC ウェブサイト 会員専用ページパスワード (2010 年 11 月～12 月)：

T7vCHg8U4r

JVC ウェブサイトの会員専用ページでは、T&E のバックナンバーを順次公開中です。



JVC CALENDAR 2011

アジアの瞳

写真 三井 昌志 Photographs by Masashi Mitsui

ポスト
カード
(6枚組)
500円

卓上型
(縦 20cm × 横 15cm ×
奥行 8cm)
1,200円

壁掛け型
(縦 56cm × 横 38.5cm)
1,500円

収益は国際協力に役立てられます



JVC スマイル年賀カード 10枚組 500円

活動地の子どもたちが描いた絵を年賀カードにしました。和風のカードも加えて全19種類。ボランティアの気持ちが生きる年賀状、是非ご利用ください。

JVC 国際協力カレンダー 2011

『アジアの瞳』

写真: 三井 昌志

2011年のカレンダーは『アジアの瞳』のタイトルで、写真家三井昌志氏の協力を得て、元気な子どもたちの笑顔でつづりました。卓上型も好評です。カレンダー、年賀カードの収益金は、アジア・アフリカでの協力活動に使われます。



日本国際ボランティアセンター (Japan International Volunteer Center) は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられるアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出すことにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉や、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

■ JVC では会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年6回この会報誌と年次報告書をお届けします。

- ◎一般会員 10,000円
- ◎学生会員 5,000円
- ◎団体会員 30,000円

※それぞれに正会員と賛助会員があります。入会のお申し込み、会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などは会員担当の寺西へ。

→ s-tera@ngo-jvc.net

■オリエンテーション (説明会) にお越しください。

JVCの活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。会場はJVC東京事務所、参加費は無料、予約不要です。

- ◎第1月曜日午後7:00 - 8:30
- ◎第2・第4土曜日午後2:00 - 3:30

■ E-mail

info@ngo-jvc.net

■ ウェブサイト

http://www.ngo-jvc.net/

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

※本誌は、日本の森の間伐材を有効利用して作られた用紙「間伐材印刷用紙」(古紙90%、間伐材パルプ10%)で作成しました。



会員数 (10月6日現在) 合計 1,242名
(正会員 607名、賛助会員 635名)